

令和5年度第1回
地域自立のための「人づくり・
学校づくり」実践委員会

議事録

令和5年度第1回地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会 議事録

- 1 開催日時 令和5年6月7日（水） 午後1時から3時
- 2 開催場所 静岡県庁別館8階第一会議室A、B、C、D
- 3 出席者
委員長 矢野 弘典
副委員長 高畑 幸
委員 飯塚 翔太
委員 片野 恵介
委員 加藤 暁子
委員 佐々木敏春（オンライン出席）
委員 坪井 則子
委員 内藤 純一
委員 藤田 尚徳
委員 松村 友吉（オンライン出席）
委員 マリ クリスティーヌ（オンライン出席）
委員 宮城 聡
委員 森谷 明子
委員 山浦 こずえ

知事 川勝 平太

4 議 事

- (1) 副委員長指名
- (2) 報告
 - ・令和5年度の協議事項及び年間スケジュール
- (3) 意見交換
 - ・グローバル人材の育成
- (4) その他
 - ・「静岡県立高等学校の在り方に関する基本計画」の策定

<p>事務局：</p>	<p>それでは、定刻となりましたので、ただいまから令和5年度第1回地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会を開催いたします。</p> <p>本日は、お忙しい中、御出席いただきまして誠にありがとうございます。</p> <p>これまで委員を務められておりました渡邊妙子様が退任をされました。そして、今年度新たに2名の方に委員をお願いいたしましたので、御紹介いたします。後ほど議事の中で、改めて御挨拶をいただくことにしております。</p> <p>初めに、飯塚翔太委員でございます。</p> <p>続きまして、坪井則子委員でございます。どうぞよろしくをお願いいたします。</p> <p>昨年度に引き続き、委員に御就任いただきました皆様も、引き続きどうぞよろしくをお願いいたします。</p> <p>なお、本日は、加藤夢叶委員、里見委員、白井委員、豊田委員、山本委員が所用により欠席となっております。</p> <p>それからウェブですけれども、松村委員は14時半までの出席ということで伺っておりますので、よろしくをお願いいたします。</p> <p>それから、この実践委員会の委員長でございますけれども、知事の御指名によりまして、矢野委員をお願いしておりますので、どうぞよろしくをお願いいたします。</p> <p>それでは、開会に当たりまして、知事より御挨拶申し上げます。</p>
<p>川勝知事：</p>	<p>大分暑くなりまして、今日はお忙しい中、御出席賜りまして、誠にありがとうございます。</p> <p>そして、また日本の誇る、世界で有名な飯塚選手にも入っていただきました。御出身は御前崎でしたね。メロンのおいしいところです。お肉もおいしい、お魚もおいしい。それから坪井さんにも、前の渡邊委員と同じ佐野美術館の館長ということで、すばらしい方にお入りいただきまして大歓迎でございます。</p> <p>皆様御案内のとおりでございますけれども、この実践委員会は、このメンバーを御覧になったら分かりますように、静岡県を代表する方々ばかりであります。そして、これは私が総合教育会議という教育委員会と首長が出席して、その意見を言うという、これは法律で決まりまして、これまでは、いわゆる政治家が教育の場に行くのはよろしくない、教育基本法の中には中立性、それから継続性、安定性、なにかんづく中立性というのが明確にうたわれておりまして、教育への介入をしてはならんということであったわけですが、社会総がかり、地域ぐるみで子どもたちを育てようじゃないかという機運が高まりまして、それで首長入りなさいということになったわけです。</p> <p>通常は、教育委員会に行ってお話するという形になっているのが恐らく大半だと思います。しかし、静岡県はもともと富士山の下で、教育レベルも文化のレベルも高いということで、今年は東アジア文化都市、日本のたった1自治体だけがその国の文化の顔、要は文化首都として、文部科学省</p>

	<p>の中核事業の一環として選ばれた、令和5年、2023年なんですけれども、非常に高いところですよ。</p> <p>それで、それをどのように教育の現場に生かすかということで、当時矢野委員長は、横綱審議委員会の委員長もやがてお務めになるような方で、その前は東芝ヨーロッパの社長、人事の矢野と言われて、また経済団体連合会の当時は専務理事もお務めになって、国際的に活躍されておられる方で、ですから社会人として国際的に通用する方ということで矢野先生にこの委員長をお願いしたと。まだ法律の定まる前から、この実践委員会を検討委員会と称してやっておりまして、そしてこのメンバーも10年ぐらいやっておりますものですから、入れ替わり立ち替わりということもございます。そうした中で、ここでお話になったことは、私が代表して総合教育会議に行つてそれをお伝えしています。</p> <p>教育委員会は、これは子どもたちを育てていくための執行機関ですよ。ですから極めて重要な権限を持っているわけですね。そこに私が行つて、皆さんの意見を言うんですけど、何しろやっぱり編集しますからね、川勝なりに。それはやっぱり、これはいいときもあるし悪いときもあります。ですから皆様方の意見は、委員長もしくは副委員長に必ず出てきていただいて、ここでのまとまった話は、総合教育会議で委員長もしくは副委員長から言つていただいて、私がまたそれに併せて総合教育会議で話をするということで、これまで幾つもの優れた施策が実施に移されてきております。それは、ベースがこの人づくり・地域づくりの実践委員会ということで、そういうことでございますので、坪井さん、それから飯塚選手も是非忌憚のない意見を堂々と言つていただいて、もう要するに万機公論に決していくということでやっておりますので、ちょっと長くなりましたけれども、そういう趣旨でこの会議をやっております。</p> <p>この会議で、私は発言はいたしません。一度も欠席したことはありません。皆勤ですよ。賞をいただかないのが残念なんですけれども、しかしじっくりお聞きして腹に入れて、そして教育の現場に生かしていくと、こういう務めをしているところでございますので、何とぞよろしくお願い申し上げます。</p>
<p>事務局：</p>	<p>ありがとうございました。</p> <p>それでは、議事に移りたいと思います。</p> <p>ここからの議事進行は、矢野委員長をお願いいたします。</p>
<p>矢野委員長：</p>	<p>矢野でございます。どうぞよろしくお願ひいたします。</p> <p>今回、新しくお二人の方に入つていただきまして、また前から続けて今年度も御快諾いただきまして、是非この1年間、充実した討議をしたいものと念願しておりますので、どうぞ皆さん、よろしくお願ひいたします。</p> <p>私も、引き続き委員長を仰せつかることになりました。微力でございますけれども、是非力を尽くしたいと考えております。</p>

ただいま知事からお話があったように、社会総がかりでいい教育を実現しようということで始まった会議でございます。

実践委員会としては9年目ですね、先ほどもお話がありましたが、検討委員会からいうと10年目になるんですね。そんなに長いことやっていたのかと自分で思うんですけども、毎年新しい話題が出てきまして、皆さんの御発言を通じて、ああそうかと気がつくことも多くて、それを総合教育会議に諮って実現してきたというここ10年であったと思います。これからも、もっとさらにフレッシュな気分でやっていきたいです。

振り返ってみますと、随分いろんなことが皆さんの御提言を基に、総合教育会議で決定して実践されてきました。幾つもの例がございます。

静岡式35人学級編制、これはようやく国の方も気がついて着手し始めていますが、それがもう静岡は前からあったわけですけども、それにさらに一歩進めて下限の25人というのを撤廃したんです。これは本当に画期的なことございまして、それだけ先生の数も必要になるわけですね。少人数学級が増えるわけですから、その先生の数も100人以上増やすという形で、本当に前向きに取り組んできた一つの成果と言えます。

そのほか地域スポーツクラブ、これがラグビーのメッカの磐田市でできまして、ずっと磐田のヤマハのラグビーの選手たちが指導者になって、地域の子どもたちを放課後に教えているんですね。これは本当に素晴らしいことです。

それから、ふじのくにグローバル人材育成基金、これはお金は民間の会社に出していただくということにしましたが、その発想自体はここから生まれて、是非静岡県の若者が、またあるいは海外交流が高まるようにということで始まった制度であります。ずっと前に定着して、コロナによる影響はありましたけれども、着実に進んでいる一つの例です。

それから、しずおか式の寺子屋とか、未来を切り拓くDream授業とか様々なこと、あるいは指定校における普通科改革などに向けた研究など、この実践委員会の論議が発端になって実ってきたケースが幾つもございます。

今年度は、子どもたちが自ら課題を立てて、協働して、解決に向けた道筋を探る探求的学習と、これは教育委員会の方から提案された新しい言葉ですが、これを一層充実しようということを目指しております。全県規模の学びの場としてオンラインプラットフォームが構築されるほか、探究シンポジウムや高校生が探究活動の成果を発表する探究フェスタなどがいろいろと計画されています。

総合教育会議と実践委員会との関係は、先ほど知事からお話があったとおりであります。この委員会で知事が一言も発言をしないというのは本当に事実です。本当に耳を傾けていただいて、その実現に向けていろいろ御配慮いただいていることを、実践委員会委員長として大変感謝しておる次第であります。

御承知のとおり、静岡では「有徳の人」づくりということを教育の基本理

	<p>念で掲げているわけですが、この方針に沿ってできるところから実践することが重要であると考えています。</p> <p>この委員会発足当初からの方針であります。1つは何かというと、小さく産んで大きく育てようという考えです。それからもう一つの考え方は、小さくても具体的に実践できる、そういう案を出し合おうということです。世の中がこうあるべきだという総論は山ほどありまして、ほとんど日の目を見ずにお蔵入りしたいろいろな考え方があるんですね。それを本当に実現するという事は、最初は小さいことであっても大変意義のあることだと思います。総論だけでは全く世の中は変わらないと思いますので、これからは是非小さくても具体的な実践の課題というのを見つけて、それを推進していくようにしてまいりたいです。</p> <p>ちょっと冒頭の挨拶が長くなりましたが、これで失礼いたします。</p> <p>それでは、早速議事に移りたいと思います。</p> <p>ここから私が担当するわけですが、議事に入る前に新たに委員に御就任いただいた飯塚さん、それから坪井さんから簡単に自己紹介兼ねて、一言御挨拶をお願いします。</p>
<p>飯 塚 委 員 :</p>	<p>皆さん、こんにちは。はじめまして。</p> <p>ミズノ株式会社の陸上部、ミズノトラッククラブに所属しております飯塚翔太と申します。今回から皆さんの実践委員会の一員として仲間にさせていただき、本当にありがとうございます。</p> <p>僕自身も、まだいまだに現役選手で陸上を続けておりまして、ちょうど先週日本選手権という大会が終えて、ちょうど今空いている時間ということで、皆さんと御一緒できる機会がありまして、本当にありがとうございます。</p> <p>僕自身も学ぶことが皆さんとお話しする中でたくさんあると思いますけれども、僕なりの意見で皆さんに少しでも貢献できるように頑張っていきたいと思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。</p> <p>そしてまた、スポーツコミッションShizuokaのスポーツアンバサダーの方も今年度からやらせていただきますので、そちらの方もどうぞよろしく願いいたします。今日はよろしく願いいたします。</p>
<p>坪 井 委 員 :</p>	<p>佐野美術館館長をしております坪井と申します。よろしく願いいたします。</p> <p>館長になりまして、すぐにコロナ禍ということになりまして、コロナが収まったタイミングでこの委員を拝命いたしました。</p> <p>博物館界の最近の流れとしては、文化を観光資源の一つとして考えるという流れがありまして、その辺りのことが今まで博物館、美術館というのが教育施設の一つだというふうに考えられていたのと少し違うといえますか、変わっていく時期に来ております。</p> <p>この会議は「人づくり・学校づくり」実践委員会ということですので、学</p>

	<p>校や子どもたちを中心とした教育と博物館の在り方といった視点から、何かお話や疑問を話させていただければと思っております。よろしくお願ひいたします。</p>
矢野委員長：	<p>ありがとうございます。よろしくお願ひします。</p> <p>皆様のいろいろな分野での御経験と、そこから培われた見識をもって、どうしたらこの静岡県の教育をよりよくすることができるか、そういう観点でいろいろとお話を伺う機会があると思ひます。よろしくお願ひします。</p> <p>それでは、最初に、設置要綱第5条第3項に基づきまして、副委員長を指名します。</p> <p>副委員長につきましては、昨年度に引き続き、才徳兼備の人づくり小委員会の委員長とともに高畑委員にお願ひします。よろしくお願ひします。</p>
高畑副委員長：	<p>よろしくお願ひします。</p>
矢野委員長：	<p>ありがとうございました。</p> <p>次に、令和5年度の協議事項及びスケジュールについて、事務局から説明をお願ひします。</p>
事務局：	<p>それでは、事務局から御説明いたします。</p> <p>資料のページ、資料1を御覧ください。</p> <p>こちらは今年度の協議事項及び年間スケジュールでございます。</p> <p>昨年度の第4回総合教育会議におきまして、今年度の協議事項は、資料記載の4つの事項とされたところでございます。それぞれの事項について、総合教育会議に先立って、本委員会で御意見をいただく予定でおります。</p> <p>1つ目は、今回の協議事項である「グローバル人材の育成」です。後ほど御説明いたしますが、「ローカルの多様性を尊重しながらグローバル社会に貢献する人材の育成方策」や、「外国人県民、外国人児童・生徒への教育の充実方策」について、御意見を伺いたいと考えております。</p> <p>2つ目は、「個々の能力や個性を生かす教育の推進」です。児童・生徒が持つ多彩な才能・能力をより伸ばす教育の推進方策や、特別な支援が必要な児童・生徒に対する教育の在り方について、御意見を伺いたいと考えております。</p> <p>3つ目は、「教育デジタルトランスフォーメーションの推進」です。コロナ禍で進んだ教育DXにつきまして、デジタル技術を活用した教育の在り方や、学校におけるデジタル技術活用の拡大方策について御意見を伺いたいと考えております。</p> <p>4つ目は、「子どもの健やかな成長を支える教育の推進」です。こちらは、昨年度に引き続き小委員会で検討を重ねることとしており、今年度に取りまとめる予定の小委員会最終報告を基に、御意見を伺いたいと考えております。</p>

	<p>2の開催スケジュールですが、総合教育会議に先立ちまして年4回この委員会を開催し、それぞれの協議事項について御意見を伺いたいと考えております。</p> <p>これらの会議のほかに、学校現場などの視察も実施したいと考えております。2ページの資料2を御覧ください。</p> <p>本委員会の下部組織である小委員会の本年度の進め方について御説明いたします。</p> <p>本年度は、昨年度から引き続き「子どもたちのウェルビーイングの実現に向けて」という理念の下、「困難を抱える子どもたちを支える環境づくりのための方策」「人口減少社会を見据えた高等学校教育の在り方」という2つのテーマについて検討することとしております。</p> <p>委員は3にございますとおり、本日御出席の高畑委員長はじめ、昨年度と同じ5名の方をお願いしております。</p> <p>今年度の開催計画は、4に記載のとおり、最終報告の取りまとめに向けて5回の会議と事例調査を予定しております。各テーマにつきまして2回ずつ会議を開催し、来年1月の第5回目の会議において最終報告を取りまとめ、2月開催予定の4回目のこの委員会で報告する予定となっております。</p> <p>事例調査では、今月山形県立小国高校とのオンラインによる意見交換会、川根高校の現地視察、9月には神奈川県立田奈高校の現地視察を行うとともに、9月頃、教育委員会の現場視察に同行する方向で調整しております。</p> <p>事務局からの説明は以上でございます。</p>
矢野委員長：	<p>ありがとうございました。</p> <p>本年度は小委員会を含めまして、ただいま事務局から説明のあったように進めたいと思いますので、どうぞよろしく願いいたします。</p> <p>それでは、協議事項に関する意見交換に移ります。</p> <p>本日のテーマは、「グローバル人材の育成」です。</p> <p>初めに、事務局から資料の説明をお願いします。</p>
事務局：	<p>それでは、3ページの資料3を御覧ください。</p> <p>本日の協議事項は、「グローバル人材の育成」です。</p> <p>グローバル化の進展や科学技術の発展は、時間と場所を超えた交流を可能とするなど、社会の在り方にも変化をもたらしており、その変化は加速していくと予想されます。</p> <p>このような中、世界の中の静岡県という視点を持ち、国際社会や地域社会に貢献できる人材の育成が求められております。さらに本年は、本県が東アジア文化都市の開催都市に選定されたことから、こうした機会を捉え、国際交流を促進していく必要があると考えます。</p> <p>また、グローバル化の進展等に伴い、県内において外国にルーツを持つ県民や児童・生徒は増加傾向にあります。こうした人々が地域で安心して快適</p>

に暮らせる多文化共生社会の実現や、子どもたちへのキャリア教育、就労支援のさらなる充実が求められています。

資料4ページを御覧ください。

こうした現状を踏まえ、本日は2つの論点について、それぞれ御意見を伺いたいと考えております。

まず論点1ですが、「ローカルの多様性を尊重しながらグローバル社会に貢献する人材の育成方策」としております。

国際交流の推進や外国語によるコミュニケーション能力の向上とともに、日本の伝統文化を理解した上で国際的な視点を持って、国内外に貢献できる人材の育成が求められています。このため、海外留学や留学生の受入れの充実、外国の歴史や文化などを理解し、他者を思いやる態度の育成、武道や茶道などの日本の伝統文化や生まれ育った地域のよさを認識できる機会の確保といった視点で御意見を伺いたいと考えております。

2つ目の論点は、「外国にルーツを持つ県民や児童・生徒の個々の実態に応じた教育の充実方策」としております。

外国にルーツを持つ児童・生徒が必要な日本語能力や学力を身につけられる教育機会を確保し、社会で自立していける環境を整備することはますます重要となっています。このような子どもたちの就学促進や進路選択への支援の充実、また外国にルーツを持つ県民が地域で安心して暮らし、生き生きと働くための環境整備などを視点に御意見をいただければと思います。

続きまして、5ページの資料4を御覧ください。

こちらは、今回のテーマに関連する県の主な取組をまとめた資料でございます。個々の取組の説明は割愛いたしますが、別冊としてお配りいたしました参考資料の関連ページも記載しておりますので、適宜御参照していただければと思います。

説明は以上でございます。

矢野委員長：

どうもありがとうございました。

資料にありますとおり論点が2つありまして、1つずつ皆さんの御意見を伺います。

最初の論点の1、「ローカルの多様性を尊重しながらグローバル社会に貢献する人材の育成方策」ということではありますが、これについて、そのグローバルという言葉は皆さんよくお耳にされると思うんですが、これは和製英語なんですね。

誰が言い出したのかについて、私は思い当たることがあるんで、皆さんの御参考にお話ししますと、もう30年以上も前になるんでしょうか。ソニーの盛田さんという会長がおられましてね、この人が「Think Globally, Act Locally」、グローバルに物を考えて地域性を尊重しながら実行する、こういう言葉を言ったんですね。御承知のとおりビジネスマンですから、グローバルイズムというものがどうなっているかということに対する見通しはしっかり

	<p>持っているわけです。しかし、それだけでは動かないということを骨身にしみて分かっているんです。それを実行するには、地域の特色を生かす。文化とか習慣とか、歴史とか伝統とか。そういう考え方なんですね。</p> <p>ですから、グローバリズムがすごく進むとどうしても画一性といいますか、同じ方が便利ということで、そっちの方がどんどん進むわけですが、それだけですと地域の特色がなくなってしまうのです。</p> <p>地域の特色は、今言ったように文化とか、習慣とか、歴史とか、そういうものに表れていくわけなんで、そういう細部を大事にしていこうじゃないかと。これは、私も当時ビジネスの世界に身を置いていた一人として、実にしっかりと耳に届いてきたいい言葉だと思っております。</p> <p>その後、これがいろんなところで用いられるようになって、盛田さんはグローバルなんて言葉は言っていないんですけども、グローバルという言葉が盛んに用いられるようになり、皆さんいろいろな物を考える一つの座標軸のようになってきたんですね。今回、この実践委員会の場でもこうした言葉が出てきたことは、とても興味深いものがあります。</p> <p>グローバリズムが進んで、あまりに画一性の追求が進みすぎた反省が、ようやくここ何年かで起こってきました。そういうときですから、特に教育問題は世界的に共通の価値観もありますが、それぞれの地域の本当の特色、よき、強み、そういうものを生かしたものでなければいけません。そういうことも一つ御参考にしていただきたいと思います。</p> <p>どなたでも結構ですが、挙手していただいて御発言いただけますでしょうか。</p> <p>いかがですか。</p> <p>それでは内藤委員どうぞ。</p>
<p>内 藤 委 員：</p>	<p>こんにちは。浜松学芸高校、内藤です。</p> <p>今日こんなシャツを着ていますが、実は昨年も青いシャツを着て参加させていただいて、今日はまた、この会議に行くという話になったら、生徒が新しいカラーを作ったので是非知事にお見せしてきてくださいということで着てまいりましたが、地元の注染浴衣の生地を使ったシャツを生徒たちが地元の企業と共同して制作しています。</p> <p>先ほどの委員長のお話で、Think Globallyなんですけど、その土台となるAct Locallyというところが欠かせないものだと思いますし、例えば、このシャツ1枚がとても大事なツールになると思うんですよね。地元で生徒たちが関わって生まれたもの、それをイベントに行って紹介する。あるいは本校にも、1,100人規模の学校ですけど、国籍的にいうと外国籍8か国から21名の生徒が在籍しているんですが、そういう子たちも一緒になって取り組むことによって、こういう地域のものが外側に広がっていく。そういう発信をすることがグローバルの中に役立っていくということになっていくんじゃないかな、そういう小さな取組がいろんなところで行われて、もしそれが横つなが</p>

	<p>りで展開できていくようなことになれば、グローカリズムという意味合いというのは、大分具体的に認識されていくようになるんじゃないかなと思ひ、取りあえず口火を切らせていただきました。</p>
矢野委員長：	<p>どうもありがとうございました。 飯塚さん、どうぞ。</p>
飯塚委員：	<p>似ている話で、同じような話になっしまいますが、半年前にバングラデシュで学校訪問と、イベントに行ってきたときに、現地に住んでいる、家がないストリートチルドレンという子どもたちが自分で機織りして作った布や、テーブルの上に敷くような布を縫って、それを空港等の土産ショップに置いてあります。それを海外の人たちが旅行の時に見て、そういったドラマを聞いて買っていきます。そういったところで海外の人たちとのコミュニケーションだったりとか、あとは旅行客からしたらそういった人を、何とか買って支援してあげたいと考えたり、一つのアイテムを介してつながりができるということを聞きました。物を介して人とつながることができる例として話させていただきました。</p>
矢野委員長：	<p>加藤さん、どうぞ。</p>
加藤（暁）委員：	<p>こんにちは。私は全国から高校生を選抜して、福岡で2週間のサマースクールをやっております。日本の次世代リーダー養成塾ということで、静岡県の子たちも毎年10人程お預かりしているんですけども、それとは別に、ここに書いていない肩書で、世界で一番古い高校生の交換留学の団体、これはニューヨークに本部があるんですが、AFSの日本協会の今理事長をしています。この5年間、今年の3月までなんですけど、国費の留学生ということで10か月間、このコロナの間も全く絶えることなく1年間200人、5年間、20か国から1,000人のアジアの留学生を全国で、静岡県でも受け入れていただきました。</p> <p>それで、そのアンケート調査結果についてですが、この留学生が来たことでとても充実したと言っているのは、留学生もさることながら日本の高校生でした。留学生たちは先ほどのお話にあったようなバングラデシュとか、スリランカとか発展途上国から来ていて、例えばパキスタンは2人の枠に2,000人ぐらいの応募がありました。選ばれた2人は相当優秀なんです。その子たちは母国語のみならず英語も堪能、それから日本語も漢字とかも書け、日本に来てからさらに日本語が上達して帰っていきます。</p> <p>そういう中で、日本人の高校生たちが俺たちはこれでいいのかという感じで、自分たちは日本語しかしゃべれないというところから発奮して、例えば農業高校とか水産高校の子たちが、これからの農業を世界に広めていくためには、英語ぐらいできないと世界に打って出られないなという思いになって</p>

	<p>います。</p> <p>これは静岡ではないのですが、佐賀の農業高校の校長先生からは、一人の留学生が来ただけで化学変化が起きて、すごく学力が上がって、すごい学校全体のレベルが上がったと聞いています。それで地域に貢献できるような高校生がこの5年間ですごく増え、本当に変わったとみんな言うてくださるそうです。</p> <p>ですから、できれば静岡県では例えば県立高校1校に1人ずつ留学生が入ると全然変わると思います。留学生がいることで、そこからまた世界に出ていこうという生徒も生まれると思います。</p> <p>それから、今現在世界中で戦争が起こっており、ウクライナというのはすごい分かりやすいから、ニュースで毎日目にすると思います。しかし、例えばミャンマーは内戦になっており、もしSNSに出したことが明るみに出たら殺されてしまうということで、外から全然見えなくなっています。スーダンやアフリカも、中近東も今や紛争だらけ。もう今のこの瞬間も、もう何百、何千という人が殺されているわけです。こういう世の中をよくするには、どこかに留学生とかが住んで交流を深めることで、やはりその国と戦争したいとは思わなくなります。一方で、日本は高齢化も進み、だんだん元気がなくなっていると言われてはいますが、一番安全な国なんですね。</p> <p>この前も3月に、マレーシアのマハティール元首相を川勝知事に受け入れていただきましたけれども、海外の皆さんは日本に来たいんです。ですから、観光を立地する、その観光とそれから農業です。食べたり触れたり、五感に触れるということがものすごく大事で、日本は平和な観光立国、その中の一番中心が静岡県ではないかといつも思っています。そういう意味でのこの若い人、これがまさしくローカルからローカルという形で、これから是非、今年はそのような留学生を本当に1校に1人受け入れることも検討いただけると随分変わるかなと思います。</p> <p>それで、やっぱり静岡県のメリットは留学生のみならず、ここで生まれ育っている外国人の人もどんどん増えているということなんです。これも日本の多様性のモデルだと私は思っています。</p>
<p>矢野委員長：</p>	<p>ありがとうございました。</p> <p>とても大事な点の御指摘だと思います。時間がかかっても、そういうことを実現したいと思いますね。</p> <p>加藤さんにちょっとお伺いしたいんですけど、毎年夏合宿を2週間おやりになって、選ばれた子どもたちでしようけれども、集まってくる若者を見て、とかく日本の若者が内向き思考になっているということを聞きますけど、どうでしょう。大丈夫ですよと言ってもらいたいんですけど、いかがでしょうか。</p>
<p>加藤（暁）委員：</p>	<p>内向きだと言っているのは大人だと思います。大人の物の見方だと思いま</p>

	<p>す。やはり委縮していると感じるのは大人がそう仕向けているからだと思います。</p> <p>特に家庭の中において、これをやったら危ないとか、これをやってはいけないと言うことがあると思います。私は、サマースクールの時等に「これをやっていいですか」とよく聞かれるのですが、その時には「あなたはやりたいの」と聞き返します。やっていいですかと私に下駄を預けるのではなくて、やりたいんだったら私を説得しなさいといつも言ってます。</p> <p>サマースクールでは20周年なものですから今年は原点に帰って、ハイスクール国会というのをやって、子どもたちが自分の地域の代表になったつもりで、20年後の日本がどうあるべきかというのを政策を立てさせることにしているんですけども、そういうのを毎年やっていて、日本の高校生たちはすごい元気ですよ。だから、私は心配することないと思うし、逆にそのやらせてあげる環境を大人がつくってあげるということがとても大事だと思います。</p>
矢野委員長：	<p>ありがとうございました。</p> <p>それで宮城さんも世界的に活躍していらっしゃるんで、どういうふうに御覧になっていらっしゃるか、このグローバルの問題についてお話しください。</p>
宮城委員：	<p>今の加藤さんの話に続けて言えば、確かにその大人の側が自信をなくしていることを子どもに映し込んでしまっているようなことはあると思うんですね。</p> <p>僕らも今、演劇アカデミーで高校生たちを受け入れていると、高校生は基本的に何の心配もないぐらい元気だと思います。しかし実際はもうちょっと後の年齢になると、例えば僕らの世界で言えば、欧米に留学するアーティストはものすごく減っています。どうして減ってしまうんだろう。それはやっぱり大人がつくった仕組みの中で、留学してもむしろ損だみたいなことがあるわけですね。</p> <p>それは、昔というとな変ですけど、例えば40年ぐらい前だったら、留学するときに損か得かということは考えなかったと思います。新しいことを、新しい人と出会いたい、知らないことと向き合いたいという、その意欲の方が損か得かなんて発想よりもはるかに大きかったと思うんですが、この損か得かという発想が出てくること自体が、やっぱり大人の考えたことが反映されているんじゃないかという気がしてしまうんですね。その意味では、事実としては、やっぱり世界を股にかけてとか、世界を土俵にとか考える人が確かに減っているのは事実だと思います。</p> <p>一方で、この年になってというとな変ですが、日本のよさみたいなことを最近盛んに世上言われるんですけども、日本がいかにもすばらしいかみたいなことです。でも、そういうのは非常に薄っぺらく感じてしまいます。僕は、日本にしかないものを見つけて、そこにしがみつこうなんて考えていたら決</p>

	<p>して発展しないと思っていて、そういう考え方では駄目だと思っています。むしろ日本にあるものが世界のここにもある、ここにもある、あるいは未開と言われていたところにもそっくりなものがあるとか、そういうものを見つけていく方がよほど日本は伸びていくと僕は考えています。ただ、逆にそういうことを発見していくためには日本のことを知らないといけないんです。</p> <p>どうもその日本はすばらしいと言っている風潮の中で、実際は日本のことをあまりよく見ていない、とても表面的なことしか見ていないんじゃないかと考えています。日本のことをよく見れば、そこにそっくりなことがほかの国でも起こっていたりして、人間というものの普遍性というものを発見できて、そのときいかに文化が違っていても人間同士は対話ができるんだ、分かり合えるんだという希望が生まれてくるんじゃないかと思います。平和の構築を考えると、やはりそこが大事なんじゃないでしょうか。いかにバックグラウンドが違って、人と人って理解できる瞬間があるんだという、この希望が実感として持っているかどうか、そこが平和の構築には大切なんじゃないかなと考えています。</p>
矢野委員長：	<p>ありがとうございました。</p> <p>オンラインで参加されている松村さんに願いますが、最近インドネシアにおいでになって高度人材の採用を決められたようですが、ビジネスの中で、外国人材というのをどういうふうにお考えになっておられるのか、ちょっと御感想を聞かせていただけますか。</p>
松村委員：	<p>松村です。よろしくお願ひします。</p> <p>高度人材採用活動は、矢野委員長が団長で行かれるんで私も一緒に行って、うちの会社の社員として採用をいたしました。インドネシアの本当に優秀な学生でありまして、なかなか普通の中小企業では採用できないぐらいのレベルの子が入社します。</p> <p>なぜそういう人を採用したかといいますと、やはりいかに中小企業であっても国際化、あるいは多様性、そういったものを意図してつくっていく必要があるというように思います。そういう意味で、これから彼を中心に、彼の周辺のインドネシアの学生をこれから少しずつと採用しながらやっていきたいと思っています。</p> <p>企業でもそういう形で、国際化というのは本当に大事だと思ってますけど、この論点1へ戻りますけれども、全てここに書いてある検討の視点はすばらしい視点で大賛成です。</p> <p>もう一つ、資料の方に教育委員会でいろんな仕掛けをされていますよね。それもすばらしいと思うんですけど、1つだけ申し上げたいことがあります。私立の高校ですと何か本当に危機意識を持って、自ら考えて、自らそういった外国の方を採用したり、いろんな専門家を採用して動こうとされるんですが、県内の公立高校になりますと、どうも受け身に見えます。</p>

	<p>企業の組織でいいますと、この県立高校の世界は県の教育委員会が本社機能で、各高校は支部、要は支店といえますかね。ですから、本社で決めたことを受け入れる、あるいは受け身で受け止めるという形になっていないかなあと。もう少しだけ各高校に経営権というのか、自立性を持たせて自ら考えていくことは必要でしょう。だから、我々も先生方だけでなく子どもたちも含めて留学生を受け入れるとか、あるいは海外へ出るとか、そういったことをやりましょうという、そういう議論をしていったらどうかなと思うんですね。</p> <p>学校の先生方は変化をするに従っていろんなことが上から降ってきて、苦労されているように思うんですが、是非自分から変えていくという意識を持って、こういう流れを受け入れていただけたらいいかなあと私は思うんです。</p> <p>ですから、教育委員会の方々の指導は絶対間違っていないで必要かもしれませんが、各学校側の受入れ体制のところちょっと不安を私は感じています。すみません、何か余分な方に話が行きました。よろしくお願いします。</p>
矢野委員長：	<p>ありがとうございました。</p> <p>いろんな場で問題提起してまいりたいと思います。</p> <p>高畑先生、大学で学生と接しておられてどうお感じでしょうか。</p>
高畑副委員長：	<p>ありがとうございます。</p> <p>静岡県立大学国際関係学部の高畑です。</p> <p>今回の論点1の話題の方は、大変身につまされる場所があります。コロナ禍で、留学を希望しながらそれができないまま卒業を迎えようとしている学生がいましたが、ようやくこの4月から留学できる学生が増え、また海外からも研究者や学生も来ていただいている、ようやくほっとしているところなんです。</p> <p>私からは、3点あります。1点目が、昨年度、待望の国際学生寮、富学寮を造っていただき、おかげさまで交換留学の学生さんや研究者が心置きなく滞在できるようになりました。海外からの留学生の受入れには住居の確保が大きな問題ですので、国際学生寮をこれからも少しずつ増やしていただければと思っております。</p> <p>それから、2点目ですが、近年の円安で海外留学が大変コスト高になっているということです。学生の中には協定校への交換留学ではなく、私費留学をする学生もいます。協定校への留学は人数に限られますので、私費留学で海外に行こうとするのですが、行きたいけれど経済的に難しいという相談が、今年から増えたように感じます。意欲はあるけれど経済的な問題で留学を諦めてしまう学生に、何か支援があればと思っております。</p> <p>それから、3点目は本当にちょっとしたことなんですけど、海外に出ると「あなたのふるさとは、どんなところ？」と必ず聞かれると思うんです。この点を説明する、あえてアナログなツールがあればと思います。</p>

	<p>例えば先ほど内藤委員と飯塚委員から「物を介した交流」が生まれるというお話がありましたが、例えば静岡県を説明するようなカードゲームでもいいですし、パズルでもいいですし、それを高校生にアイデアを出してもらって作ってはいかががでしょうか。それをこれから留学に行く学生たちに持たせると、滞在先で出会う人たちとのコミュニケーションのきっかけになるんじゃないかなと思います。こうした本当に小さいことからでも始めていけると考えております。</p> <p>私からは以上です。</p>
<p>矢野委員長：</p>	<p>ありがとうございます。</p> <p>森谷さん、日本文化あるいは歴史、そういったものについていつもいい御意見をいただいておりますが、この問題はいかがでしょうか。</p>
<p>森谷委員：</p>	<p>絵描きの森谷です。よろしくお願いいたします。</p> <p>今日は何を話したらいいのかなと、すごい分からなくなっています。色々なところでこれを宣伝して歩いているんですけども、藤枝市の高洲南小学校で、この黙想というのを1日に何回か取り組んでいるということを知りましたので、見学に行きたいと思っています。</p> <p>教育委員会も忙しいと思いますが、是非これを広げていくための具体的なプロジェクトといただけますか、何かやってもらえたらなと思っています。そのまま放置しているとこのまま消えていってしまいそうな気がしています。また、この呼吸法、黙想というのは日本文化のベースになっているところなものですから、武道といい茶道といい、あらゆる日本文化のベースとしてもこれを広げていけたらなと思っています。</p> <p>今回資料を見せていただいて、武道と茶道に比較的特化して、いろんな取組をしてくださっているのを本当にすばらしいなと思って、ありがたいなと思っています。</p> <p>実際、海外からの日本文化を求める声というのは本当に年々広がっているのを聞いておまして、日本語を学びたいという生徒も日本学校ですごい増えているということや、それから日本に来る観光客も増えています。特に京都もすごい観光客が増えています。</p> <p>彼らは何を求めるかという、先ほど平和という言葉が出たんですけど、やっぱり日本の平和の文化にすごく興味があるようです。発展途上国の方は、とにかく日本を目標に頑張っています。先進国の方たちも自分たちの西洋文化とは何か違うものが何かあるのではないかと気付き始めて、例えば禅とかクールとかという言い方があるんですけど、その禅やクールの奥には何かあるんだろうと来ています。私の知っている生徒でも、海外から来たんだけど、何かそれが日常の生活の中とか、学校の中で学ばなくて残念だったと感じて帰る留学生もいたりして、もう少し日本全体的には、やっ</p>

ぱり日本文化になかなか興味を持っている高校生というのは本当に少ないものですから、生徒にもっと日本文化を学んでもらうというか、知ってもらえるチャンスを増やしていけたらと思っています。

先ほど宮城委員から同じところを探してという、それもすごい素晴らしいことだと思うし、同じところを見つけてつながっていくというのもすごい素晴らしいことだと思いますが、日本にしかないというところも見つけて発信していくというのも大事だとは思っています。先ほどの平和の文化というのは、私は静岡から平和の和の文化、和の文化というのは、やっぱり和というのは名前だけ和なんじゃなくて、本当に融合する力、物事を整えていく、平和的に解決する力がやっぱり日本の和の文化にあるので、それをしっかり深掘りして、言語化して、英訳までして、子どもたちに伝えたり、日本にいる海外ルーツにする子どもたちに伝えたり、あるいは海外に伝えたりということを積極的に静岡県からできたらいいなと思うんですね。

海外の人はやっぱり京都を目指してきますし、京都に勝るところはないと思います。それから、ポップカルチャーなんかの意味では東京を目指してきます。静岡は何ができるのかなということなんですけれども、私が思うに、やっぱりこの平和的な和の文化というのは発信できていると思っています。

何でかという、私、ユネスコの副会長もやっていますが、2年前にユネスコ遺産で、世界遺産で縄文文化が今注目されて、もう全世界から縄文文化が本当に評価されているんですね。海外の人も縄文を目指して来るわけなんですけれども、この縄文文化のすごく面白いところというのが、いわゆる人類文明、四大文明と言われてはいますが、その四大文明とルーツが違っていたということです。一般的には、四大文明は戦争と環境破壊をしながら人類は発展してきたんですけれども、縄文文化に関しては、戦争と環境破壊の痕跡がゼロなんですね。それがやっぱり日本文化のルーツになってくるわけなものですから、そうしたあらゆる武道とか茶道とか、日本文化はこの縄文の平和的世界観を引いています。

何で静岡かということなんですけれども、実は静岡の富士山世界遺産というのが、縄文のその共存できる平和的な世界観をそのまま数千年同じ形で体現しているというすごく面白い文化です。縄文中期のストーンサークルと同じことを静岡は浅間神社でやっているという、この奇跡的な生きた縄文文化というのは静岡から発信できたということ、和文化というのも、その平和に特化した和文化というのをもう少し言語化して、本当に言語化しにくい文化なんですけど、あえて言語化して、英訳までして伝えていけたらなという、何かそんな本とかを県から出してもらえたらいいなと思っています。

矢野委員長：

ありがとうございました。

この論点1の視点の中に武道という言葉があるんですけど、まだ武道の問題をこの場でしっかり論議したことはないんですけど、いずれ取り上げてみたいと思うんですね。

	<p>広くはスポーツ、文武芸の三道鼎立というのが当県の方針の一つであります。武というのは広くはスポーツということで武道に限るわけではありませんが、この武道について少し深めてみようかと考え、今検討が始まっています。少し形ができたなら皆さんにも報告して、御意見を伺うつもりでおります。どうぞ、藤田さん、お願いいたします。</p>
<p>藤田委員：</p>	<p>ありがとうございます。</p> <p>グローバル・ローカル、グローバルということなんですけれども、いろいろ考えている中で、やはり私も非常に海外が好きであっちこっち行ったりとか、自分の娘たちにもどんどん行かせるようにしているんですけれども、いつも思うところで、やっぱり自分のまちをどういうふうにプレゼンできるのかな、彼女たちができるのかなと思ったときに、多分自分のまちのことをそんなに知らないでしょう。今、郷土学とか地域学というものをどんどん取り入れていると思いますが、この論点1の中で、日本の伝統文化を理解した上でという中に、静岡の伝統文化を理解した上でということも入れて、私一つ思ったのが、地域のプレゼンを学生にどんどんさせて、その中でプレゼン上位者にはどんどん海外に行ってもらおうとか、いかに静岡の文化というものを高校生や中学生が自分の言葉で、もしよければそれが英語でもいいんですけれども、そういう場をたくさん県としては提供するのがいいのかなと思っています。</p> <p>そういう中で、私も前から、もう5年になりますけれども、三保の松原の松葉かきをずっとやっているんですけれども、今、清水南高校と雙葉学園さんが定期的に来てくれるようになって、南高の中学生、高校生たちが、一般参加者に集まったときに、三保の松原の松葉かきの重要性とか歴史を自分たちで調べて、それを参加者に話してくれたりとかしてくれるようになってきました。これは自分のつくった一般社団でやっているんですけれども、こういったことがどんどん広がってきて、民間と組んでそういった形がどんどんできてくればいいのかと思っています。では、何で私がそういうことに目を向けてやっているのかなあと思ったときに、先ほど加藤さんのお話にもあったように、やっぱり親から海外を見ろと言われていたんですよ。今はどっちかという、先ほどの宮城委員のおっしゃったように、なかなか海外が遠くなっているか、脅威というか、どっちかという安全性を取ってしまう教育の仕方になっています。家庭での教育がそうになってしまっているのもっともっと御両親が海外に行ったらどうなんだというところも含めて、親学というわけじゃないんですけれども、そういうムーブメントをつくっていくことが必要なのかなあと思っています。</p> <p>なので、確かに企業経営をしている中で人材不足とあって、今までは静岡、もしくはちょっと離れて東海地区の人たちを採用と思っていましたけれども、明日からまた当社にもベトナム人が6人入国して、あさってから早速働いてもらうんですけれども、全く当社では壁を感じずに、どんどん海外文化や海外の人というのをやっています。その原点になっているのは、やっぱり</p>

	<p>一番効くのは自分の親、確かに周りの先生とかもあるかもしれないですけど、親の言うことというのは、本当に親の感覚というのはとっても子どもたちの教育にとって大事な部分だと思いますので、その辺も併せてやったらいいのかなと思っています。</p> <p>ちなみに、私の娘が高校2年生と3年生で、来年、今年受験なんですけれども、娘たちに、じゃあもし志望校に受かったら、海外じゃあどこか連れて行ってあげるから一緒に行こうねと言ったら、いや、要らないと。片道切符で十分ですと言われて、それはそれでうれしいのか寂しいのか、今のところ海外にしっかり目を向けてくれていると思いました。しっかりと海外も見ながら、それで地元のことをしっかりと語って、地元に貢献していってもらえるような環境をつくっていくことが大事なのかなと思っています。</p> <p>以上です。</p>
矢野委員長：	<p>ありがとうございました。</p> <p>片野さん、その後、佐々木さん、お願いします。</p>
片野委員	<p>函南町で酪農をやっております片野です。よろしくお願いします。</p> <p>先に、この論題とはちょっとそれてしまうんですけども、伊東高校がこの令和5年度から新しく3校が再編されまして、無事に開校されたということで、まずは本当におめでとうございますというところなんですけれども、蓋を開けてみますと、普通科が少し定員が割れてしまっている状態だということで、少しまた懸念材料は残されたままなのかなというところで、僕自身、どうしてこの普通科がここまで倍率を下げってしまうのかというのは、実のところ偏差値で物事をはかる普通科と今までのそのやり方が、子どもたちにとってはもうあまり魅力がなくなっているのかな。もし魅力があるとするならば、より偏差値の高いところにその子どもたちは行くと思うんですよ。</p> <p>実際、伊東の子どもたちの中の知り合いに聞いてみたところ、その子は朝5時40分の電車に乗って田方の方に行くと。優秀な子どもたちは優秀な高校の方に、そこに新しい普通科ができたとしても既存の偏差値が高いところに向かって朝早起きしてでもそこに行くというところで、なかなか思うとおりに優秀な子どもたちが地域で分散して学び舎で学んでいただけないという状況が今続いているのかなというところで、少し懸念を感じております。</p> <p>では、このままでいいのかといえば、本当にまた20年、30年たったときに、その市町から普通科の高校が消えてしまえば当然若者は流出してしまう。そうすれば、その地域は廃れていく一方になってしまう。それを歯止めをかけるためには、内々の学校づくりではこのままではいけないのかなと思います。今までは、それこそ地域の子どもたちが通いやすい学び舎を提供し続けるということが県の宿命というか役目でありましたけれども、それにプラス、それこそ海外の子どもたちも歓迎できるような、また海外の子どもたちに受け入れられるような学校づくりというのを加えていかなければならないのか</p>

	<p>な。伊豆半島は袋小路です。流出はしやすく中には入ってこられないような、そういう地域でございます。そういうところで海外の人たちに、伊豆の中の中まで入っていただけるような、そういう環境を今後つくっていくことが大事なのかなと思います。</p> <p>海外留学生に補助金は当然使うべきなんです。それは子どもたちが伊豆半島の魅力を発信する発信者にもなっていただけだと思うんですね。そうやって、ああ、伊豆ってすごいんだということを、例えば中国の方々、モンゴルの方々、東南アジアの方々に知っていただけるようにしていくことによって、伊豆半島が発展を遂げるというような仕組みになるのかなと思います。それこそ伊豆半島、坪内逍遙や川端康成先生などが本当に伊豆を愛してくださった。やっぱり感性を磨ける土地柄なのかな。</p> <p>本当に芸術、また文学ということをしっかり勉強し、またそれを創作していくのに伊豆ほどすばらしい地域はないのかなと僕自身ずっと思っていました、それこそ伊東高校は城ヶ崎のところ、きれいな海岸線、そういうのもありますし、小室山もあります。一碧湖もあります。そこで海外の子どもたちと交わって芸術活動、創作活動にいそしむ、そういう姿を想像していましたが、どうしてもやはり内側というか県内の、市内の子どもたちを優先して、その子たちの学び舎をなくすということはと行ったところで今の場所に落ち着いたとは思ってはいるんですけども、どうにもこのまま行ってもここまで伊東高校、また今後、令和7年には沼津西高校と城北が合併していきますけれども、果たして子どもたちに受け入れられるような、そういうグローバル、そういうふうなところに落ち着いていけるのか、また発展していけるのかということに少し今懸念を感じていまして発言させていただきました。よろしくをお願いします。</p>
矢野委員長：	<p>ありがとうございました。</p> <p>今の片野さんのお話、高校の再編成の問題とも関連しますね。いろいろな角度から議論を深めていったらいいんじゃないかと思います。</p> <p>佐々木さん、聞こえますか。</p>
佐々木 委員：	<p>ありがとうございます。先ほど矢野委員長のお話があった武道についても、これから深めていきたいとおっしゃっていただいて、このテーマにも本当に深く関与していると思いますし、私、武道をかじった経験もありますが、今本当に武道がスポーツ化して、その精神性が失われていくと、そういった色彩は日本においてより濃いんじゃないかという危機感もあります。やはり欧米の方が精神性に重きを置いた訓練、鍛錬を引き続き続けているんじゃないかというような思いを深くしているところであります。</p> <p>どのスポーツにおいても、まず体力、そこから技を磨いて心に達するというところでしょうけれども、そこをあえて逆に心技体とって広めていった日本の武道の奥深さについてもう一度学び直さなければいけないなと思っています。</p>

るところです。

今回のこの論点1につきまして、標題を読んだときに、自分に翻ってみたときに非常に足元が寒くて、自分たちこそできていないという強い反省に立つわけですけれども、だからこそ、こういった今高校生の皆さんにあえて託していく、我々と同じような失敗を繰り返さないでほしいというようなことかなあとあって、これを考えてみました。

やっぱり我々足りないところというのは、やっぱりどうしても高校生時代って自分のことを振り返ってみますと、ローカルだとかグローバルだとかということも考えたことがなかったわけで、自分が一体何者なのかもあまり分からず悶々としていたような時代だったかと思えます。

そんな中で、今求められている、これまでも皆さんと一緒に議論してきたことといえば、やっぱり日本の社会においてきちんと自らの意思だとか考えを持って、理路整然と考え伝え切るといような、そういう力が我々企業においてもほぼないですし、それがどんどん劣化していつているような気がします。そういった技術自体が、そういったこと自体も弱くなっている中で、その背景にあるのはやっぱり日本の同一性だとか、あうんの呼吸みたいなこと、やっぱりはっきり言わないことがいいことなんだといような日本の文化に決別しないとこういことはきちんとした取組ができないだろうなあとあって、我々も企業に身を置いております。

また、こういったグローバルで活躍し世界で成功している人たちを見ると、やっぱり何かすごい強い興味があって、そのことをやり遂げたいとい強い思いがあって、努力し続ける力があって、それでグローバルに活躍する。その中でもう一度、世界の高みに達した中で日本のよさをまた発見していくだとか、精神性をもう一度自分で取り込んで、また高みに達していくとい、そういうことをやっているんだろうと思えます。

最近、テレビ番組で「博士ちゃん」という番組を見ていつも感心するんですけども、小・中学生が実は研究者顔負けの知識だとか表現力だとか発信力を持っているわけです。これを見て、やっぱり一つ自信をつけるということが非常に大きな力を自分に備えさせるんだなということに改めて感じます。ボーダレスでいろんな人ときちっとした会話ができる、それは語学ができなくても会話ができることで、尊敬を集められる。この力というのは非常に強い力で、やっぱり若いうちから一つ何か自分の自信になる軸となるものをしっかりつくるといことが非常に大事なんだろうと思えます。

だんだん企業も今、会社の業績向上ということが非常に大きな命題でありますけれども、その目標達成のために多国籍で取り組んで対応をしているわけです。多国籍の人たちを取り入れて企業活動を行っているわけですけれども、そういった中でもいろんな奮闘があります。そういった考え方や経験を企業の方たちに聞くのも高校教育に生かせる道ではないかなと思ったりもします。

私からは以上です。

坪井委員：	<p>ありがとうございました。 坪井さん、どうぞ。</p>
矢野委員長：	<p>私自身は、高校生以下の今の子どもたち、そんなに内に籠もって内向きな ことしか考えていない、世界というものが視野に入っていないくて外へ出てい かないというような子どもたちではないという感覚があります。私が子ども の頃と今の子どもたちと全く社会環境が違って、まずインターネットの 世界で生きていますから、そもそも国を超えて何かコミュニケーションをと るといようなことに対する抵抗感はありませんかと思っ ています。そういう中で、実際に自分の体で海外へ出ていく人が少なくなっ てい たら、そういうチャンスを家庭なり学校なり社会なりというものが与え ていない、チャンスを作り切れていないのかもしれないと思っ ました。</p> <p>先ほど加藤委員がおっしゃっていた、学校に1人ずつ留学生がいると子 ども たちが変わるというお話は、その通りだと思っ ました。例えばスポ ーツ界などで1人ヒーローが出ると、すごくその競技の裾野が広がるとか、 将棋の藤井聡太君が1人出てくると将棋をやろうとする子どもが増えてくる というふう に、自分たちとは違うレベルの人の存在を知ることが、周 りに与える影響というのは大きいのではないかと思っ ますし、やはり大人が そういう環境をつくっていくということも大事だと思っ ました。</p> <p>佐野美術館では、入館協約校といっ て、近隣の高校生が全員無料で入れる 協約を結んでいるんですけれども、その学校の生徒が全員来るかという とそ うでもない。来ないということは、生徒が来たいと思っ ているかどうかより も、学校があまりそういうチャンスをうまく生徒に伝え切れていないとい う こともあるのかなと思っ ています。その意味では子どもたちの資質以上に大人 がそういう場をつくっていくということが大事かなと思っ ました。</p>
山浦委員：	<p>私は、公立の小・中・高のいろんな学校で地域と学校をつないだりです と か、子どもと大人をつないでいるんですけれども、職場体験先というの も開 拓してありまして、すごくチャンスは近くにあるなといつも思っ ています。 クラスに大体1人か2人は外国にルーツのある子がいますし、職場体験で開 拓する先にも、例えばベトナムの方とかブラジルの方とかフィリピンの方 が たくさんいらっしゃる。また、近所で自転車でたくさん外国の方が通りか か ったりするとき、いつもとても元気に挨拶をしてくださいますね。そう い ったお互いに交流したり理解したりということが本当はすごく身近でや れ ると思っ ています。</p> <p>ブラジル人学校というのが県内にありまして、浜松にも3校、磐田に1校、 そ れで東部の方にもありまして、論点2の方にもなるんですけれども、参 考 資料の69ページの外国にルーツを持つ子の活躍支援というところで、ブラ ジ ル人学校の子どものキャリア支援という部分で、国際交流協会さんと一</p>

緒にブラジル人学校さんの子どもたちのキャリア支援を少し御一緒させていただくことができました。これは数年前にブラジル人学校さんの職場体験というのを独自にそこの日本語の先生と一緒にやったことがあるんですけども、ブラジル人学校と公立の学校というのは本当に分断されていると感じました。それぞれの学校がこんなに近くにあるんだから、もっと交流すればいいとすごく思いました。

ブラジル人学校の子たちも職場体験で外に出ようよと言ったときに、最初は怖いというのものもあるのか、えーっという感じだったんですけども、実際現場に出て日本の企業で職場体験をしてみたところ、やっぱり楽しい、もっと日本語を話したいということになって、日本語検定の試験を受けたいという子が11人中10人も出てきて、もう一人の子も受けたいと言っていないけど実はすごく勉強していたということの後から聞きました。やっぱり現場に出ることが大事だなと思ひまして、それには論点1の日本の伝統文化を理解した上で国際的な感覚や視点を持ってとありますけれども、日本の伝統文化を理解しようって思っている、なかなか中にいると魅力が分からないので、出てみるのがすごく大事かなと思ひます。なるべくアウェーに出た方がいいのではと思ひますので、それぞれの学校でうまく交流ができるようになれば、それぞれの文化をプレゼンできるような機会がつかれないかなと思ひています。

もう一点、今、静岡産業大学で冠講座といいまして、いろいろな企業様の冠がついた授業がありまして、昨年度からジュビロさんの講座というのをコーディネートしているんですけども、今年学生さんの中にブラジルの子がいて、ブラジル人の市民の皆さんになるべく多くヤマハスタジアムに足を運んでもらうという企画を今しております。

その中で、そのブラジル人の男の子、日本語は流暢にしゃべれるんですけども、実際にブラジルの料理をジュビロのスタジアムに運ぼうといったときに、電話でやり取りしてもらったんです。そうしたら、ほかの学生さんたちがポルトガル語を流暢にしゃべって電話で交渉している姿を見て、かっこいいというふうになりまして、こんな身近にこんなにいい教材があるんだなとすごく思いましたので、せっかく、特に西部の方はブラジル人の方を中心としたいろいろな外国人の方がいらっしゃるの、この方たちとの交流で、まさしくグローバルということが体験できると思ひております。以上です。

矢野委員長：

ありがとうございます。

論点2の方に関連するお話も大分出てきましたので、お話が限りがないと思ひますが、論点2の方に移ります。論点1についてもまた御意見があれば、戻って御発言いただいても結構です。

外国にルーツを持つ県民や児童・生徒の心、実態に応じた教育の充実、方策ということですね、子どもたちの交流も含めてどうすればいいかということですが、どうぞ、また御自由に発言をお願いします。

	<p>マリさん、手を挙げられましたか。 じゃあ、マリさん、お願いします。</p>
<p>クリスティーヌ委員：</p>	<p>外国にルーツを持つ子どもという視点で話させていただきます。</p> <p>私、孫がアメリカから先週帰ってきました。それで、孫たちはアメリカの学校に今行っていまして、アメリカではいろいろ大変なこともあったようです。外国にルーツを持つ子どもたちがアメリカに行ったという状況だったんですけれども、学校がとてもインターナショナルな学校なので、いろんな国の文化、スポーツであったり、食べ物であったり、文化全般的について常に発表させる授業があるんですね。ですから浴衣を送ってあげたりお箸を送ってあげたりいろんなことをしました。子どもたちが英語で自分たちの日本の文化、富士山のこととか桜のこととか、そういうものを発表することで、お互い自慢し合うそうです。</p> <p>先ほど話題にあったように、日本の学校に1人だけでも外国にルーツを持つ子どもたちが入ると、やっぱり彼らの誇り、プライド、そしてself-esteemというものも学校の中で育ててあげなければいけないのと、先ほどお話がありましたように、ポルトガル語でお話をされたことで周りの人たちも、ああ、この子は外国の言葉しゃべれるんだということで、お互いを尊重し合う教育がすごく重要だと思います。</p> <p>私の子どもたちが小さかったときに、日本の学校に行っていた子をアメリカに行かせるときに、日本から来る子どもが1か月夏休みの間来るけれども、アメリカはまだ夏休みじゃないので、そうすると、うちの子どもに合わせてくれてジャパNSTADYウイークというのを作ってくれました。それで航空会社とかいろんなところから日本のポスターを先生がもってきて、学校中に富士山のポスターを貼って、子どもたちに日本の文化の話をしながら富士山の絵を描かせたり、また日本風な鳥居を書かせたり、日本の子どもたちを迎えてくれました。お礼に子どもたちが向こうの子どもたちに折り紙の折り方を教えたりしました。ですからアメリカの学校はチャンスを活用するのが非常に得意なんですね。日本の中でも外国から来られている子どもたちを先生方が上手に自分の授業の中に組み込める、やはりイマジネーションを持っていたかかないかと思えます。もちろんやらなくてはならない授業もあると思いますが、同じ授業をやりながらでもやろうと思えばできるわけなんですね。やはりこれが言っている少数の子どもが入ってきたときに、その子が誇りが持てたり、たたえていただけるとなると、お互いにとってプラスになると思うんです。</p> <p>もう一つ、私、静岡県はスポーツ・文化に非常に力を入れているのは大事だと思っているんですけれども、孫たちが行っている学校に、スポーツ選手たちがたくさんいるんですね、ゴルフもテニスも何事も全部。学校に授業をスポーツ授業として毎回有名な先生が来られて、例えばゴルフクラブのシャフトの呼び方とか、これはクラブのヘッドだとか、グリップはこうだとかい</p>

	<p>って、それを幼稚園の子どもたちに教えているんですね。そして、授業でやるスポーツを2つ決めるので、何をやりたいのかを選んでくださいと。そうすると魅力のある先生のところに子どもたちは集まってしまうけれども、調整してうまく分配することで、子どもたちが自分がやりたいスポーツに、小さいときから触れることができ、成長していった時にちゃんとした予備知識を持った形でスポーツに参加できるので、それが非常に私は静岡県だったらできそうな感じがするので、是非そういうことも学校の中で取り組んでいただけたらいいなと思いました。</p>
<p>矢野委員長：</p>	<p>ありがとうございました。大変興味深いお話をありがとうございます。はい、どうぞ、宮城さん。</p>
<p>宮城委員：</p>	<p>さっきちょっと僕、言い方が大ざっぱだったので、その補足も含めて申し上げたいと思うんですが、僕は、まず日本の伝統文化を理解した上で国際的な感覚や視点を持ってという、この順番が実はなかなか難しいと正直思っています。さっき佐々木委員からもお話があったように、自分の高校時代を振り返ると、あまりグローバルとかいう発想もなく、むしろどちらかというとい異なるものの方にまず興味を持っていったという、それは全く普通だと思います。高校生ぐらいであれば、自分が今まで何となく当たり前を持っているもの以外のものにまず興味を持つ、これが普通の順番じゃないでしょうか。そのときに、あまりこの日本の伝統文化を理解した上でということ、これを先にしてしまうと、さっき僕が申し上げたことなんですが、非常に薄っぺらな、これは日本にしかないよという、この薄っぺらなものばかりを押しつけるようなことになりかねない。</p> <p>僕の世代の反省としては、これは日本のお家芸だと僕が成長する途中で非常に強く言われていたものが、この10年ぐらいでほとんどなくなっていくわけですよ。まねできちゃうということが分かる。追い抜かれたりもする。そのときに今の日本の現役世代というかが自信を失ってしまったわけですから、その日本のお家芸だと言われていたことは結構薄っぺらだった。</p> <p>じゃあ、本当に日本的なものというのは何なんだろうということを知るためには、自分たち以外のことを知らないと分からないですよ。自分たち以外のものを知って初めて、本当に日本的だと気付く。例えばインドの仏教、中国の仏教と比べて日本の仏教がこうなっていると気づいたときに初めて、そこには日本的なバックグラウンドが浸透したからこのような仏教の変容が起こったんだということがやっと分かるわけであって、というわけで、僕は高校生ぐらいのときにあまり日本の伝統文化どうとこうというのを先に出さない方がいいんじゃないかというふうに思っていて、むしろ違うものと出会うことのそのわくわくを大事にしたらどうかと。</p> <p>それで、さっきからお話があるように、自分のクラスにバックグラウンドが違う生徒がいる、あるいは自分の学校のすぐそばにバックグラウンドの違</p>

	<p>う生徒たちがいる、このことを上手に先生が活用できれば、特に高校生ぐらいの世代であれば、こんな違うものがあるんだ、知りたいなと思って、その知りたいなの先に、最終的には、こういうところが日本独自なんだなと気が付いていくんじゃないか。</p> <p>それで、じゃあ僕が日本独自のものというのは本当に何なんだと考えているかと、その結論を先に申し上げてしまうと、結局日本語と日本の気候風土だと僕は思っています。日本語及び日本の気候風土。例えば仏教という思想が入ってきても、漢訳仏典が入ってきても、日本語と日本の気候風土によって変容が起こる。じゃあ日本の気候と日本の言語をいつ身につけるのか、これはむしろ高校生よりもっと前の時点での教育、あるいは環境が大事ではないか。だから、小さいうちに日本語をちゃんと学ぶべきではないかということと、日本の気候風土を存分に浴びるべきではないか、というのが僕の今の考えです。以上です。</p>
矢野委員長：	<p>ありがとうございます。</p> <p>はい、飯塚さん、どうぞ。</p>
飯塚委員：	<p>ありがとうございます。</p> <p>宮城さんのお話と少し似ているんですけども、自分の国で外国語を学ぶ人と、その言葉を現地で学ぶ人と少し違って、日本で英語を勉強してしゃべる人と現地で英語を学んでしゃべる人、それは先ほど言ったように異文化の人たちと一緒にいる中で英語を覚えた人と語学のみ覚えた人というのはかなり違うものがあって、留学生の受入れもすごく素晴らしいと思っていて、先ほどの公立高校にも1人ずつというところもすごくいいなと思っていて、そういった人がいる中で英語を学ぶこと、そしてその人たちとまたコミュニケーションを取りたいという子どもたちも増えてくると思いますし、外国人の受入れの準備も生徒たちができると、そういう人たちが来る中で勉強するというイメージを自分たちがすることができるというのもグローバル化のスタートになると思います。藤田さんがおっしゃったように、自分が実際親の関係だったり自分が実際見て変わった方ってたくさんいらっしゃると思うので、それが行くこともなく自分の生まれたところで勉強することで海外に興味を持ってもらうということに対しても外国人の方を呼ぶということはずごくいいと思います。そして、その自分の生まれ育った土地の教育を経て、今の子どもたちが静岡県ってどんな県なんだろうということを日本の前に静岡県ってどんな所なんだろうと静岡の子どもたちが発信するときに、もちろん特産物だったり自然だったり文化だったりもあるんですけど、それに加えて教育も子どもたちが認識をして周りに伝えられるということ、それは静岡に来るとグローバル化の教育をされていると。実際みんな教室にこんな人がいて、こんなコミュニケーションを取れたりとか、静岡県に来るとこんな人になれるよと、それを子どもたちが認識をして外に伝えることができると、も</p>

	<p>っと静岡県の魅力に加速がつくのではないかと思うので、こういった受入れをし続けることが最終的に海外からの受入れもしやすくなる、現地の環境も整うかなと思っております。</p>
<p>矢野委員長：</p>	<p>ありがとうございました。 はい、森谷さんどうぞ。</p>
<p>森谷委員：</p>	<p>ありがとうございます。</p> <p>先ほど監督から日本語の話が出まして、実は今日それを伝えたいなど思っていたのと全く同感であります。武道と茶道のことは特化して書いてあったんですけど、やはり基本は日本語なので、日本語に関する何か取組というのは必要かなと思っています。</p> <p>高校生と今関わっているんですけど、授業の中で一番無駄と思われるのは古典だとみんな言うんですね。古典は絶対もう使わないから要らないと。みんな口をそろえてそれを言います。ということは、日本語の美しさとか響きのよさとか、何かそういったものを学校の中で堪能できてないんだと思うんです。</p> <p>国語、日本の表現の美しさが分かってくると、そのやっぱり日本文化の根源って日本語なんで、ほかのものもつるつると伝わるようになっていって、やはり何といても古典を含めた言語教育かなと思っています。</p> <p>それからもう一つは、グローバル化というのはどうしてもついつい留学すると思ってしまうかもしれないんですけど、私は大学が筑波大だったんですけども、多分国立大の中で一番留学生が多い大学でした。私の日本画の教室の中は、日本画教室なのに半分以上外国で、公用語が中国語でした。台湾と中国の人が本当にいっぱいいたり、バングラデシュ等からも来ていて、日本にいながらにしてつながれたというのがすごい筑波にいてよかったなと思います。その当時の体験から、日本でなければできないことがあるとすごく思い知って、例えば台湾と中国の人が仲よく話すって日本だからできることであって、日本の立ち位置とか役割というのはそこで本当に痛感して、いろんな生の声を聞けて、今もユネスコに関わっているのはそのときスイッチが入ったからです。</p> <p>ですから、私のイメージとしては、もちろん留学も大事ですけども、静岡にいながらにしていろんな留学生とつながれるという場がもっとあっていかなと思っていて、先ほど加藤委員から1人留学生がいるだけで変わるといっても本当にそのとおりで、本当に世界が変わっていく。だけど、例えば静岡に来ている留学生の子たちが日本人も含めて割と定期的に会えるような場があれば、留学生の子たちも日本に来てよかったと思えますし、日本人の子たちもそこでまた考えが変わるし、そこでディベートができたり、発言ができたり、助け合いができたり、母国に帰ってからもつながれるネットワークができたりというのがあるといいとすごく思います。そこでまた、先ほど</p>

	<p>も言った日本文化ってやはり精神性の高いものがあるので、それを今まで言語化してこなかったの、それをちゃんと、こういう文化があるよとか、例えば武道だったら勝ってガッツポーズしないのは何でとか、ちゃんと伝えられたり、お茶だったら茶室がどうしてこんなに小さいのと、どうしてこんな質素なのか、それも伝えられて、こういう文化があつて、こういう精神でこういう世界があるというのをお土産で持たせてあげられる。そういう充実した環境があれば、先ほど飯塚さんがおっしゃったように、何か留学生に対して吸引力のある静岡になるとか、留学するなら静岡に行こうみたいになっていくんじゃないかなと思います。</p>
<p>矢野委員長：</p>	<p>ありがとうございました。</p> <p>宮城さんと森谷さんから日本語の大事さという御指摘がありました。本当に私も同感です。それはやっぱり読書というものにつながっていくと思うんですね。今年度は、是非読書の問題を取り上げて議論したいと思います。呼吸法については皆さんの御提案がこれから具体化しようとしておりますので、それも見守りたいと思いますけど、読書、つまり日本語ですね、私も国際ビジネスに関りましたが、流ちょうな英語なんてどんなにしたいってできないですね。でも日本語で考えてこうだというふうに頭が整理できますと、それに伴って英語でも出てくるんですね。出てくるって、まあ辞書を調べなければいけません、通じるんですよ全部ね。</p> <p>日本から何かを買おうという人たちが来た場合には、こっちで話すことはどれほどつたなくても向こうの人は真剣に正解を求めて聞いてきますね。こっちから何か買おうというときは、向こうはいろいろ魂胆がありますから、よっぽどちゃんと話しないと伝わらない、そういうもんなんです。一種の人間関係なんです。でも、一番のものは日本語でどこまで自分を鍛えるかの問題に帰するのかもしれないと思います。それが哲学とか音楽とか絵画とか、あるいはより高遠な世界になるとその語彙が全然ないために大変困りますが、それも努力すれば何とかかなると思います。</p> <p>本当に日本語の問題、それにつながる読書の問題、これは取り上げてみたいと思いますね。今日はちょっとほかのテーマもありますので、お二方から問題提起があったことを申し上げるにとどめます。</p> <p>加藤さん、どうぞ。</p>
<p>加藤（暁）委員：</p>	<p>今の国語の問題に関係して、英語の問題というのもあると思うんですけども、これは日本人の生徒がいかにか英語を勉強するかということだと思います。これもすごく大きな問題だと思っていて、コミュニケーション能力じゃないかなと思うんですね。よく私も思うんですが、いわゆる英語をいかにか文法的に正しく表現するかということもさることながら、それよりもいかにか中身のあることを英語で伝えるかということなのかなと思うんですが、やはり伝える内容がなければ相手には伝わらないわけです。そこら辺のところは今</p>

	<p>の日本の英語教育には欠けているかなあと。何かモチベーションが上がらないというか。英語の先生いらっしやったら申し訳ないんですけど。</p> <p>だから、私はいつも生徒というか高校生たちが来たら、自分の好きなこと、例えば自分が陸上競技だったら陸上競技とか、例えばサッカーとか、それからあとファッションとか、そういう興味のあるものを例えば英語の雑誌とかをネットで検索していけば、自分の興味のあることだったらこの単語は何だろうと、とことんさっきの問題じゃないんですけども調べると思うんですよ。ですから、そういうことも教えていかななくてはいけないのかなと思います。</p> <p>それと、全然違うことなんですが、資料の53ページにあるこの県立ふじのくに中学校（夜間中学）のことが資料にも書いてありますが、全く門外漢でよく分かっていないんですが、授業の時間が午後5時15分から8時45分とあるんですが、どのぐらいの人たちが、また幾つぐらいの人たちがこれに通っているのかなという疑問を持ちました。今まで中学で勉強できなかった人が、ここで勉強して修了証書を得ようということはすごい大事で、これによって多分就職とかにもつながっていくと思うんですけども、そもそもアルバイトとかしていると5時15分とかに行けるのかとか、それとかあと土・日も授業はないですよ。なので、これは多分学校の先生たちのことを考えてこういう時間帯になっているのかなという気もしないではないですけども、そこら辺のところは疑問があります。</p> <p>もう一個ですね、うちの娘が都立国際高校というところを卒業したんですけども、そこは大体いつも20か国ぐらいの子が通っていたんですが、必ず入学式とか卒業式にはPTAの方でもお願いして、その来た子たちの全部の国の旗を掲げるようにしたんですね。ルーツってすごい大事なので、日本の学校ってやっぱり日の丸だけなんで、参加している通学している高校の子たちのやっぱり旗を掲揚して、アイデンティティー、あなたたちは素晴らしい国から来たねとか、そういうルーツがあるんだというのを、入学したときとか卒業したときに自分のルーツを誇りに思えればいいんじゃないかと思うので、そういうことも提案させていただきます。</p>
矢野委員長：	<p>ありがとうございました。</p> <p>夜間中学はまだ始まったばかりなんですけど、どんな状況か教育委員会の事務局の方からお話ししていただけますか。</p>
事務局：	<p>教育委員会でございます。</p> <p>夜間中学、今年度第1期生を受け入れたところでございます、まず人数の方でございますけれども、全体で14名の入学生を受け入れてございます。磐田と三島の方に本校と分教室を持っておりまして、磐田が9名、三島が5名という状況でございます。</p> <p>この中学校は、夜間中学校は何らかの理由で義務教育が十分に受けられな</p>

	<p>かった方、今中学校にこの学齢で15歳まで通える子ではなく、この学齢を過ぎた方ですね、中学校を何らかの形で形式的に卒業したりとかで、16歳以降の方が改めてこの夜間中学校で学び直しをできるという学校を県として用意をしたところでございます。</p> <p>年齢なんですけれども16歳以降ということなんですけど、16歳から19歳までの方が一番多い年齢層でございますけれども、40代の方、また70代の方も学び直しということで現在通学をいただいております。</p> <p>また、外国籍の方がやはり多いということで半数以上、7割、8割程度は外国籍の方という状況になってございます。以上でございます。</p>
矢野委員長：	授業時間は、支障なく運営されているんでしょうか。
事務局：	まだ手探りの状況ですけれども、5時15分からということで、1日40分授業を4コマ開始をしておりますけれども、現時点では何か支障があるということはないです。
矢野委員長：	<p>ありがとうございました。</p> <p>よろしいですか。</p> <p>ほかにいかがでしょうか。</p> <p>それじゃあ高畑さん先に、それから内藤さん。</p>
高畑委員：	<p>ありがとうございます。高畑です。</p> <p>論点2に関して、私からもお話しさせていただきたく思います。</p> <p>外国籍の県民が10万人ということで、外国ルーツの子どもがたくさんいる静岡県です。外国ルーツの子どもたちは、おそらく生活世界が2つに分かれていると思います。1つが、日本の学校、つまり静岡の学校に保育園からずっと通って、そこになじんで育つ子どもたちがいます。例えば、県立大学で卒業生の方からの寄附により2019年度から、外国ルーツの新入生に入学祝い金を出すという制度があり、その申請者数は毎年増えております。今年度は特に増えました。ですので、全く日本語ネイティブの家庭で育った子と変わらずに日本語を習得して学校教育を受け、入試を経て入学する学生さんたちがいます。</p> <p>一方、静岡県内には南米系の外国人学校があります。そこに在籍している子どもの数はおよそ1,000人です。南米系の外国人学校では教育言語がポルトガル語ですので、日本に住んでいながらもポルトガル語の生活で、静岡に住んでいても、彼らのコミュニティの中で暮らしている、日本の学校に通う子どもと南米系の学校に通う子どもとが2つ生活世界に分かれていると思います。</p> <p>まず、日本の学校に通っている外国人の生徒さんでも、資料の60ページの表を見ますと、合計820人中、定時制・通信制が319人ということで、約4割</p>

	<p>が定時制に通っています。全日制への入学がまだ難しいということでしょうし、定時制に通っている生徒さんたちの多さが目を引きます。定時制高校では、資料の61ページの課題でも書かれていましたが、先生の少なさもあって十分な対応が難しいとありますの。この点は、小委員会で取り組んでおります困難を抱える高校生の中に含まれるのが外国ルーツの生徒ですので、定時制に通っている生徒さんたちの進路や就職支援なども含めて、サポートしていく必要があると思います。</p> <p>次に、外国人学校にずっと通っている生徒さんにとっては、やはり日本語の習得が大事なのは確かで、現実には「日本語の壁が全ての壁」のようになってしまっていると思います。これを打開するためには、スポーツと芸術のポテンシャルは高いと思っています。私は11年前からブラジル人学校の先生と連携して、毎月1回、私のゼミ生がブラジル人学校にお邪魔して日本語の会話の練習相手になるという活動をしてきました。学校の施設や提供できる科目には限りがあり、スポーツや芸術や食育等も、なかなか行き届かないところがあるようです。これを補うように、各分野の指導者を派遣したり、クラブ活動に協力するといった形で、プロの方がその学校の中に入って指導する機会が年に1回でもあれば、そこから子どもたちが地元の武道の道場に通ってみるとか、クラブチームに入るとか、よい意味での「外の世界への流れ」が出てくるのではないかと思います。御検討いただければと思います。</p>
矢野委員長：	<p>ありがとうございました。 それでは、内藤さん、どうぞ。</p>
内藤委員：	<p>論点2の肝は、やはり外国にルーツを持つ子たちが学び、進路を決め、そして働きながら豊かな生活を送っていけるという道筋をどうつくっていくかということだと思っんですね。ちょうど今、高畑委員がおっしゃったこととすごく重なるんですけど、冒頭、本校に今8か国21名の子たちがいるという話をしたんですが、その子たちは全く問題ないです。それは、家庭環境だったりいろいろな要素がその子たちに日本への順応ということを有利に働いているんじゃないかなと思います。</p> <p>実は、なかなか日本に溶け込んでいけない方たち、子どもたちの情報って正直つかみ切れていないところがあると思います。そこって、事細かにつまびらかにとは思わないんですけど、そこをもう少し地域全体で共有化していかないと、なかなかこの問題って解決の方向に向かわないんじゃないかなと思うんですよ。私も学校というか教育の場に身を置きながら、正直なところあまり情報を持っていません。何とかその辺から手をつけていくことが大切ではないかなと、話をお伺いしながら感じました。以上です。</p>
矢野委員長：	<p>ありがとうございました。 皆さんまだまだたくさん御意見があると思うんですが、もう一つ皆さんに</p>

	<p>御報告しなくてはならないテーマがありますので、そちらの方に移らせていただきます。</p> <p>今まで皆さんから伺った意見については、総合教育会議で私から報告をさせていただくつもりです。</p> <p>それから静岡県立高校の在り方に関する基本計画の策定であります、これについて事務局から簡単に説明をお願いします。</p>
<p>事務局：</p>	<p>それではよろしくお願いたします。</p> <p>資料の5、7ページの方を御覧ください。</p> <p>「静岡県立高等学校の在り方に関する基本計画」の策定というタイトルになっています。</p> <p>昨年、県立高校の在り方につきまして基本方針を策定しているという状況につきまして御報告させていただきました。出来上がったものが9ページ以降、13ページ、14ページまでございますので、こちらの方はまた御確認いただければと思います。</p> <p>どんな内容が書いてあるかといいますと、大ざっぱに言いますと、7ページで構成案（イメージ）、基本方針で検討という太字で囲んだ部分にありますけれども、学びの変革、地域との連携、教育基盤の確立という3つの柱に基づきまして、その記載のポイントであるような取組を進めていくというようなことを記載しております。ただ、実際に進めていくに当たりまして、この記載のポイントというところだけではかなり大ざっぱですので、このページ、2のところがございますとおり、基本方針に基づき、より具体的な記載として基本計画を今年度策定してまいります。</p> <p>また、各地域、現在、賀茂と沼津と小笠で地域協議会を進めており、各地域ごとの高校の在り方を検討しておりますけれども、こちらの方でもこちらの計画の内容を参考としてまいります。</p> <p>8ページの方に行きまして、策定の進め方というところがございますけれども、特に小委員会の議論の内容とこちらの内容につきましては具体的に重なってくる部分がございますので、お互いに情報共有させていただきながら歩調を合わせて取り組む内容を検討させていただければと思っております。</p> <p>また、今年度につきましても実践委員会、総合教育会議で状況につきまして、内容につきまして御報告をさせていただければと思っております。</p> <p>委員構成及びスケジュールは、こちらのとおりでございます。</p> <p>簡単ですが、説明は以上でございます。</p>
<p>矢野委員長：</p>	<p>ありがとうございました。</p> <p>高畑さんも小委員会でいろいろと論議なさっていますから、いろいろ連携してどうぞ進めていただきたいと思います。</p> <p>特に皆様から御意見があればお伺いしたいと思いますが、いかがでしょうか。</p>

内藤委員：	高校の件についてです。
矢野委員長：	はい。
内藤委員：	<p>高校に身を置きますので、「静岡県立高等学校の在り方」については、その県立の「立」という文字を外して、「静岡県高等学校の在り方」として本当に考えていかなくてはいけないということは、もう間違いなく生徒数が減るわけですから、10年後に受検者層が3分の2になるわけですので、公私関係なく公私の連携というのは欠かせないと思っています。</p> <p>そういう中で、別に私は私立の代表ではありませんが、私立は知事の認可事項である定員をちゃんと守っていくということがまずあって、それで全体の中でどういう存在でいるのかということを考えていかなくてはいけないと思いますし、公立はすごく特色を出すためにいろいろな動きを取られているというのは傍目で見ている感じなんですけれども、これは毎回私が言っていますが、やはり校長先生の異動があまり頻繁にあると変わるものも変わらないとずっと思っています。なので、何かそういうところに手を入れられることができるのかなって、そういうことも一体として県の高校全体でうまく考えていけたらいいんじゃないかなと思っています。</p>
矢野委員長：	<p>ありがとうございました。</p> <p>今、この策定委員会などを通じていろいろ論議がなされていくと思いますが、広い視点からの議論も必要だと考えております。</p> <p>もう時間が押し迫ってまいりましたので、大変中途半端になったかもしれませんが、申し訳ございませんが、皆様からいただいた意見は今後、議論の参考として事務局としても記録して、そして今後の議論の参考に供したいというふうに思います。</p> <p>では、終わりに当たりまして知事から一言お願いいたします。</p>
川勝知事：	<p>どうも、今日も活発な御提言、また御意見賜りましてありがとうございました。</p> <p>冒頭、矢野委員長の方から、できることから始めようということで、今日は加藤さんが、この海外の高校生を受け入れる、交換するその組織の理事長になられたときから一貫して言われておりまして、まだ実現できていないので大変恥ずかしいと思っています。ですから今日、具体的に、教育委員会は県立高校を所管しておりますので、内藤先生のところも既に20名以上いらっしゃるということなんですが、県立高校は原則お一人ですね、受け入れることができるかどうか、一步踏み出してもらったらどうかなということ、飯塚さんやほかの方も賛成意見が出ておりましたので、この自分が何かというのは違うものに接しないと自分が分かりませんのでね。</p>

それから日本というのは海に囲まれたというのは、これはもうやめた方がいいと思います。海に開かれたというのがいいと。日本の島の数がこれまで6,800だと言われていたのが今1万四千幾らになったということで、これは最近国土院が発表したんですけども、島国、要するに海に開かれているわけですね。今、静岡県には127か国、10万弱の外国人の人がいらっしやいます。大事なことは、お互いに平和で生活ができるということですね。ですから一切差別をしないということです。それは相手を尊重するということがございますので、平和というのはもう本当に大切なことだと。

これをどうしていくのか難しいんですけども、このところ日本の大河ドラマも家康さんとか徳川時代に比較的集中しています。ですから、この戦国という、言ってみれば日本というのが仮に世界とすれば、それを平和にしたわけですね、それで270年続いたわけですよ。ですから、そういうのがここから富士山と関わっています。

やはり富士山に感化されて家康という少年は大きくなって、横で富士山を仰ぎ見ながらここで亡くなられたわけでありますから、そういうことを上手にやっていると歴史も、それから地元のこともローカルなことが分ると同時に、やはりその当時、ヨーロッパは戦争ばかりやっていたわけですから、いわゆる宗教戦争をやっていたわけです。いわゆる30年戦争というやつです。新教と旧教に分かれてお互い殺し合っていたわけです。もうルールがありません。そして、ルールができるのは1648年のことですから、ですからそういう国際法のルールもないままやっていたわけです。ですから、なぜ向こうはやっていて、こちらは平和になったのかということを手を上げて学校の先生が歴史の授業等のときに言われると、うまく聞けるんじゃないかと思ったりしました。

ともかくこれはちょっといろんなアイデアが出ましたので、それは置きまして、海外から優秀な、選ばれた2000分の2というんですよ、パキスタンですか、そういう人たちが来てくれるなら諸手を挙げて歓迎したらどうかと。食事とか、それからホームステイをすると。それから国際寮という言い方はやめてもらいたいと思いますね。県外から来ている人はやっぱり大変なんですよ、住居が。ですから県内から通う以外の人には外国人も、それから日本人の方も、沖縄から来ているとか日本海側から来ているとか、誰も差別しないと。そこでの共通語は、恐らく英語よりも日本語になるんじゃないでしょうかね。その日本語の中心は寮にいる日本人の秋田弁になったりずうずう弁になるかもしれませんけれども、そういうものになるんじゃないでしょうかね。そういうこととして一切差別をしない。ただし、違いますので区別はされたようですね、もう宗教も違ふとか、肌の色が違ふとか、食べ物が違ふとか、これがおもしろい、楽しめるというふうにしなくてはいかんということで、大きなことが分かっているわけですが、どういうふうにするかということで、総合教育会議で言えるのは、この留学生を加藤さんの力を借りてしばらくやってみるといことは具体的な課題としてできるんじゃないかと、私はほかの意見の中で、これは次やってみようかなと思ったことの一つでありま

	す。ありがとうございました。
矢野委員長：	<p>ありがとうございました。</p> <p>皆さんの御意見はまとめまして、総合教育会議で報告いたします。</p> <p>今日は、どうも長時間ありがとうございました。</p> <p>以上で議事は終了しますので、事務局にバトンタッチします。</p>
事務局：	<p>長時間にわたりましてありがとうございました。</p> <p>次の第2回の実践委員会につきましては、9月19日火曜日午後1時半からの開催を予定しております。詳細につきましては改めて事務局から御連絡をいたしますので、どうぞよろしく願いいたします。</p> <p>それでは、以上をもちまして令和5年度第1回地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会を終了いたします。ありがとうございました。</p>